

原武哲著 『夏目漱石と菅虎雄 布衣禅情を楽しむ心友』

松本, 常彦
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/12014>

出版情報 : 語文研究. 58, pp.61-65, 1984-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

原武 哲 著 『夏目漱石と菅虎雄すがとらお』

布衣禅情を樂しむ心友』

松 本 常 彦

漱石にかかわる研究は多い。研究史をあまねく展望するのさえ容易ではない。それほどに種々の視点から種々の方法によって研究がなされてきた。むろん漱石周辺の人物についての研究も少なくないのである。しかるに菅虎雄という、ある意味では漱石評伝の鍵を握ると目される人物とその生涯についての精緻で本格的な跡づけの作業は本書以前にはなされなかった。その作業の綿密をきわめることは、たとえば本書に付された菅虎雄年譜および菅家系図（四二八頁～四六七頁）を瞥見しても、その一端は知られるのであるが、こうした漱石周辺の人物の具体像を丹念に実証していく著者の方法は、またあらたなる漱石研究の地平を切り拓く一斧斤たり得よう。

ひとり漱石研究という面に限定せずともよい。元治元年十月十八日筑後国御井郡呉服町四十三番地に、有馬藩典医御医師の二男として生をうけ、昭和十八年十一月十三日八十歳を一期として歿した明治の一知識人の特異な生の軌跡として本書を読むことも許されよう。第一章から最後の第四十九章まで時間を逐って記述されていることも手伝ってか、幕末の動乱期に生をうけ草創期の近代国家としての日本と、その歩みをほぼ同じくした一明治人の伝記としても実にお

もしろいのである。その点で、著者も本書中しばしば参考にしている青江舜二郎著『狩野享吉の生涯（昭49・11明治書院）』と同じ趣がなくもない。

しかしながら著者の目論見は漱石の周辺の人物として菅虎雄その人の評伝をものすることにあつたのではけつしてないだろう。また、それはたんに菅虎雄の側から漱石に与えた影響をさぐるといったことにもとどまるまい。おそらくは書題がそれを暗示している。「夏目漱石と菅虎雄 布衣禅情を樂しむ心友」、このとおよび副題によせて著者の語らんとしたものは、漱石と菅虎雄とのほさまにありながら、両者をつつみこみその存在と関係のありようを支えている何かではなかったのか。三好行雄氏（鷗外と漱石―明治のエートス―昭58・5力富書房）の言葉をかりて、その何かを、かりに八明治のエートス√とよんでおいてもよい。少しく三好氏の言葉を引用しよう。

「明治のエートスという言葉を、読者はたとえば明治の精神だとか、明治の倫理的性格、明治人気質等々、好きなように読みかえていただいて、すこしも差し支えない。おそらく鷗外と漱石の文

学を通じて感得される心性の等質性は、明治という一時代を体现した、さまざまな呼びかたを許すような形で現れるだろう（略）作家であった漱石と、そうでなかった——むしろ作家をきらい、文学の世界をうとんじ、生涯を通じて自分を語ることを自らに禁じたとみえる菅虎雄と。その点で、両者は対照的というより対立的ともみえる。にもかかわらず、本書が吾等に開示するのは、おのがじしに生きた両者の生の非連続面ではなく、明治という時代の中で、彼らの存在のありようを支える時代のハエトスVと心性の等質性という連続面であり、その連続面を背景に成立したハ心友Vという、いわば求心的な関係のありようである。第一章の章題を「金蘭の友 菅 虎雄」とし、最終章を「去り行く金蘭の友」と結んだ著者の意図も、そこに存しよう。

金蘭の語がたついでに著者の筆法について一言しておく。易経にみえる金蘭の語は今日の古言である。古言の使用が文の調和を傷つけるのは、鷗外の「空車」でとくところ。しかし、本書の文体は金蘭の語を容れて、なおそのような齟齬を感ぜしめない。それを可能にしたのは、資料自体に語らせることによって成り立つ簡浄の筆であり、述して作らずの態度をくずそうとせぬ著者の一貫した意志的な姿勢である。先の文脈にもどして言えば、つまりは古言があらたなる生命を得るほどに、時代のハエトスVが把握されているということになるうか。

しからば、そのハエトスVとは何ぞや、という問いが当然のごとくおこるであろうが、それは三好氏の言に徴しても分かるように、多義的であり、その内容を特定すると反って解釈に無理が生じよう。しかし、ここで本書にそって、時代のハエトスVを感じさせるも

のを一つだけあげておこう。たとえばハ禪Vである。本書第五章で、著者は「蒼龍窟会上居士禪子名刺」という今北洪川の居士帖を紹介し、第八章で漱石の最初の参禅についてふれ、さらに第十二章で熊本見性寺参禅のことについて述べている。第五章で紹介された居士帖を見ると、早川千吉郎、鈴木馬左也、平沼騏一郎、沢柳政太郎、北条時敬といった、後に官界で活躍することになる人物、米山保三郎（建築家志望であった漱石を文学者志望へと変えさせた。この人物についての詳しい考証は本書四十八頁～六十一頁にある）、瀧田了信、阪牧善辰、松本文三郎、菅虎雄といった、漱石の友人や同窓の人物、あるいは「門」で宜道として描かれることになる（本書一〇三頁～一〇五頁）釈宗活人沢謙四郎といった人物の名前が認められる。明治二十年代から三十年代へかけて、思想的潮流として、禅の流れのあったことを、こうした具体的資料を通じて知ることができる。そのような流れの中で、漱石も明治二十七年十二月二十三日に、菅虎雄の紹介で、鎌倉円覚寺に参じ、熊本時代には見性禅寺に出入りし、明治二十九年九月初めの博多旅行の途次に、久留米梅林寺を訪ね「碧嶽録」の提唱をうけるといった一連の行動をとるのである。むろん、漱石研究の立場からいえば、漱石における禅のもつ意味の独自性を追求することが究極の目標ではあるが、その前提として、時代思潮としての明治期の禅の流行をしっかりと把握しておくことが必須の作業となる。したがって、この方面での著者の実証的研究は、漱石と禅という、まことに難解な研究課題をとく上で、必ずすべき貴重な資料と視座を与えていると言つてよい。

本書が通時的に書かれていることは既にふれたが、ここで本書の内容を示すと次のとおり。

序文(今井源衛氏) 一、金蘭の友菅虎雄、二、菅家の家系一久留米有馬藩典医一、三、虎雄の生い立ち、四、笈を負うて、五、ドイツ文学の権輿、六、教師の道へ、七、学習院就職運動、八、青春の彷徨、九、松山落ち、十、肥後路へ、十一、森の都能本、十二、膠漆の友去る、十三、耶馬溪旅行、十四、肥後路黄昏、十五、漱石帰朝、十七、虎雄清国南京へ、十八、書聖・李瑞清との交歓、十九、虎雄の母、貞の死、二十、漱石の神経衰弱、二十一、借金、二十二、「吾輩は猫である」とパナマ帽、二十三、望郷、二十四、清国より帰朝、二十五、古き都へ―漱石江湖の処士に―、二十六、洛中生活、二十七、一高への返り咲き、二十八、漱石の糖尿病、二十九、「文学評論」、三十、妻・静代の死、三十一、「満韓とてころく」の中の筑後人、三十二、しのび寄る老い、三十三、修善寺の大患、三十四、重武の死、三十五、博士号辞退と行徳二郎、三十六、破れ障子、三十七、松根東洋城の父母の戒名、三十八、紅ヶ谷の別荘、三十九、「初秋の一日」と釈宗演の巡錫、四十、「社会と自分」、四十一、芥川龍之介の法帖趣味、四十二、文学博士号と杉浦重剛、四十三、菅家の墳墓、四十四、郭尚先の書、四十五、副島蒼海の書、四十六、漱石の易簧、四十七、後の業、四十八、残された者たち、四十九、去り行く金蘭の友、菅虎雄年譜、菅家系図、あとがき、人名索引。

なお各々の章に、いくつかの小題があり、序文の前に初公開のものを含む五十数葉の写真が掲載されている。著者はこれまでに「国文学」(学燈社)をはじめとして、諸誌に漱石および菅虎雄についての研究を発表しているわけだが、その成果が右にみるようなかたちで全貌をあらわすと、あらためてその射程の長さに驚かざるを得ない。

また千余名の名をふくむ人名索引は著者の視野の広さと目配りもさることながら、後学のものへの配慮が感じられ有難い。

著者の筆法を考えればあたりまえのことであるが、本書の魅力のひとつに新資料の紹介による旧来の見解の訂正とそれによる研究の進展があげられる。たとえば、本書十二章にある「佐賀福岡尋常中学校参観報告書」がそれ。明治三十年秋の漱石五高教授時代の出張報告書で漱石の自筆にかかるが、この資料の発見によって、従来は同行したのは山川信次郎だとされていたのが、実は武藤虎太という国語漢文歴史の教授であったことが判明した。著者は、この資料的価値について「一つは明治三十年秋の漱石伝記の空白部分を埋めることができたこと、二つは漱石の英語教育観を知ることができたこと、三つは漱石の自筆であること」と指摘しているが、二つめの漱石の英語教育観などは意外に知られていないだけに貴重な発見である。

また、第五章に紹介された「明治二十四年六月六日写 紀元会々員」と裏書きされた一葉の写真がそれ。この写真の存在と、漱石が帝国大学文学科入学の明治二十三年が紀元二千五百五十年にあたることから、著者は紀元会の結成を明治二十三年九月以降年末までの期間と推定し、その意義を「近代西欧文明を真剣に摂取し、それを従来からの日本精神と結合させて、ここに始めて新日本の黎明を期す」ところにあったのだとする。著者はまた結成時の紀元会々員の年齢と専攻とをあげているが、年齢も二十二歳から三十二歳までまちまちであり、専攻の学問も文理に広くわたっている。これらのことから、吾等はこの当時の時代性を教えらるる。

また、第七章にある明治二十六年七月十三日付立花銚三郎宛漱石

書簡がそれ。この資料により、漱石の学習院就職運動に主として立ち働いたのが村田祐治というよりもむしろ立花銃三郎であった可能性が高まり、その経緯の一端をうかがい知ることが出来る。

また、第十一章に紹介された電報・電文案などの資料がそれ。これらの資料によって五高招聘当時の五高側の動きを知ることが出来る。

本書によってあらたに照明をあてられた人物も多い。たとえば、第三十五章にある行徳二郎にかかわる事跡の調査などがそれで、著者によって新資料を参考にした年譜がまとめられている。

あるいは、第三十二章の「満韓ところ」の中の「筑後人」もそれ。「満韓ところ」(明治42年10月21日〜同12月30日朝日新聞)は、当時の時代思潮や政治状況からみれば、必ずしも当時の一般読者の期待していた内容に適合しているとは言えず、著者が述べているように「満韓ところ」ではなくて「漱石ところ」であると言われたほど、満韓の自然そのものよりも、満韓で会った漱石の旧友の懐旧談で持ち切った紀行文であり、非常に私的な内容となっている。とすれば、当然これを読む興味に私的なものが働くわけで、そこに、登場する人物の詮索や追求をおこなう必要が生じ、そうした作業を通じて内容の魅力が増大するといつてよいだろう。ここで著者の紹介している筑後人は五人。「吾輩は猫である」の多々良三平のモデルと目される俣野義郎、漱石の二年先輩にあたり帝大英文科最初の卒業生立花政樹、後の大連市長村井啓太郎、関東都督府民政長官白仁武、松本清張の「小説東京帝国大学」にも登場する隈本繁吉である。彼等の行跡を著者自身は「傍道にそれすぎた」と言いながらも、実に詳細に跡づけている。こうした、人物の

追跡調査が当時の文化や世相をうかがわせるものである以上は、「傍道」が「傍道」にとどまらないのは言うまでもなく、むしろ時代の深さを知る上では不可避の調査であったと言える。

また、漱石五高在職時代に関連をもった人物についても北山正迪氏の研究(漱石の「祝辞」について―漱石と黒本植―)「文学」54・11)をうけて、黒本植、浅井栄熙といった、北山氏の所謂「見性禅寺グループ」の人々についての追跡調査がある。さらに、明治三十一年の夏目鏡子入水事件で、浅井栄熙のもとで事件もみ消しに一役かった人物、当時の九州日々新聞社長であり熊本市会議員でもあった山田珠一についての考証もみのがせない。

右にみてきたような、新資料の発掘や人物の追跡調査が、いかに困難の多く学問的情熱を必要とするものであるか、それは文字通りの断簡零墨を求め、故人の墓石を掃苔し、各地に居住の子孫の人々の門をたたき、研究者郷土史家ともたえず連絡をとりあうといった荒正人流の猛烈なものであるらしい。あるらしいと書いたのは、著者がそうした方面についての苦勞に筆のおよぶことをおさえているためである。たとえば、漱石が留学先のロンドンから書いた書簡で、漱石書簡中で最も長い明治三十四年二月九日付書簡についても「なお、この二月九日付狩野、大塚、菅、山川宛書簡は不思議な縁で私の掌中に落ちた」という具合に書くのである。そこで吾等は、本書を前に想像するしかないのであるが、著者があとがきで述べている「今、私は拙書の「あとがき」を荒正人氏の鎮魂のつもりで書いています。」「荒氏には、漱石だけではなく、いろいろなことを教えていただいたが、中でも学問の厳しさを一番強く教えられた」という文からもおよそ著者の本書に臨んだ決意と情熱は察せられよう。

すでに紙幅の余裕がなくなりつつあるが、ここで評者の当面の研究対象である芥川にひきつけて本書をみると、著者は、一高教師の中で「ひとり菅虎雄のみ、敬愛のまなこをもって」眺められたと述べ、さらに「書の師としての菅、人生の師としての菅に敬愛の念を抱いていた。」とも言う。芥川が菅虎雄に敬愛の念をもっていたことは、菅虎雄宛芥川書簡や単行本「羅生門」で菅虎雄の手をわずらわせたことに徴してもわかるのであるが、ただ、芥川の生涯を思うとき、芥川が、人生の師と著者の言う菅虎雄からくみとったものは一体何だったのかという疑問がおこらざるを得ない。その瞑目に際して「すんだ」と書いて天寿を全うした明治人菅虎雄の孜々たる歩みと、三十六歳で自害しなければならなかった大正の作家芥川龍之介の飛翔にも似たその生涯との懸隔はあまりにも大きい。その懸隔のもつ意味を文化的あるいは文明的側面に留意しつつ、問う作業は今後、菅虎雄芥川双方の視点からなされるべき研究課題として残っていると言えよう。

ともあれ、本書全体の印象を一言でまとめるなら、何よりも、漱石という文脈の背後にあった、時代の文脈を感得させるという点で、貴重な示唆に富む本であったと言えることができる。なお、最後に、著者の原武哲氏からは本書刊行後も多数の新資料発見の報が寄せられているということを報告して、この紹介の結びとしたい。

(昭和五十八年十二月発行 教育出版センター刊。四九二頁、

六八〇〇円)